

---

# 悪魔倶楽部

星喰蛇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔倶楽部

### 【Nコード】

N5644X

### 【作者名】

星喰蛇

### 【あらすじ】

「相馬君。世界は今日滅びるわ」

クラスメートの詩織から告げられたその言葉から物語は始まった。現世と魔界をつなぐ扉が開く現象・“魔都生誕”の影響から奇跡的に生き延びた樹流徒（きりゅうと）は、事の真相を探るべく人々の骸が横たわる封鎖された都市で一人行動を開始した。行く先々で襲いかかる悪魔を倒し彼らを吸収することで次第に強さを増し能力を得る樹流徒。彼はひよんなことから悪魔が集う小さな酒場で情報を集めることになる。“天使の犬”と呼ばれる組織や謎の第三勢力も出現する中、地

上で暗躍する悪魔達は何か巨大な計画を進めていた。\*あらすじを書き直しました。

## 本作をお読みになる前に（注意点・更新について）

### 注意点について

- ・この小説に登場する人物・土地・建造物・企業は実在するものと一切の関係がございません。
- ・この小説に登場する天使や悪魔などには作者によるオリジナル設定が追加されていますのでそういうのが嫌いな方はご注意ください。
- ・この小説には暴力描写が多分に含まれております。苦手な方はご注意ください。
- ・この小説には特定の宗教を賞賛したり逆に貶める意図は一切ございません。

### 更新について

- ・更新は不定期です。遅くなる場合はどれだけお待たせしてしまうか分かりません（作者のモチベーションの波が激しいため）。予めご了承ください。

### その他

- ・本項の内容は予告無しに変更・追加・削除されることがあります。予めご了承ください。

本作をお読みになる前に（注意点・更新について）（後書き）

まだ第一章で止まってしまっている他の小説もあるのですが、先にこちらの作品を書きたかったので始めてしまいました。すいません。

## 少女の予言

「相馬君。ちよつといい？」

「え」

意外な人物から声をかけられ、普段表情の起伏に乏しい樹流徒は珍しく瞳を丸くした。

彼に話し掛けたのはクラスメートの伊佐木詩織。

樹流徒とは小・中・高とずっと同じ学校に通っていたため顔と名前くらいは知っていたが特に親しくも無い女子だった。

「僕に何か用事？」

樹流徒はそっけなく答える。実際は至って自然に喋っているのだが、彼のドライな口調と鋭い瞳が他人にはそっけない印象を与えるのだった。

だがそれは詩織にも共通している。彼女もまたどこか冷めた声色と視線をいつからか自然に有していた。

「今時間ある？少し話したいことがあるの。そんなに時間は取らせないから」

「いいよ」

樹流徒は躊躇うことも嫌な顔をすることも無く二つ返事で了承した。

彼はこれから真っ直ぐ自宅に帰るだけだったので特に断る理由も無かった。

「それじゃあ図書室へ行きましょう」

詩織は踵かかとを返す。長く美しい黒髪が翻った。空気を受けさらさらと流れる。

「待ってくれ」

「なに？」

樹流徒が呼び止めると詩織は体半分彼の方へ向ける。

「その話、ここで聞いたら駄目なのか？」

「ええ。できれば誰もいない所で聞いて貰いたい話だから」

「そう」

「迷惑？」

「別に」

「それじゃ先に行ってるから」

詩織はスタスタと教室を出てゆく。

廊下には部活・塾・家路を急ぐ生徒達が行き交っている。その波に紛れて消えた。

樹流徒は今すぐ彼女の後を追うことも出来たが、教室の中で数分潰してから出ることにした。

机の下に押し込んだばかりの椅子を引いて着席する。そして宙を見つめぼんやりと考えた。

伊佐木さんは一体何の話をする気だろう。

愛の告白という流れは期待できなかつた。これまで詩織との間に恋愛感情が芽生えそうな出来事は何一つ無かつたし、それ以前に彼女は恋愛そのものに余り興味がなさそうに見えるからである。

では何の話をするつもりなのか？彼は色々予測をしてみたが、そんな事を考えている間にそろそろ彼女に会いに行けば良いという結論に至った。

.....

### 図書室。

ここは普段昼休みなどに訪れると少人数の生徒を見かけるが放課後になれば無人の空間になる。

学校の近くに大きな図書館があるので需要はそちらへ移っていた。

樹流徒がそこに着くと詩織1人しかいなかった。彼女は椅子に腰掛けていたが彼が現れると立ち上がり

「相馬君。こっちへ」

本棚の裏へ隠れた。

余程他人にこの現場を見られたくないらしい。樹流徒にはそう見えただ。

彼が詩織の後を追うと彼女は正面を向いて立ち止まっていた。

2人のすぐ横には窓があつてそこから学校の裏庭とテニスコートが見渡せる。テニス部員が4名、早くも熱のこもった練習を始めている。

「来てくれてありがとう」

「いや。それで話つて?」

「少し唐突な話になるけれど」

「ああ」

「相馬君は世界が滅びるのっていつだと思つ?」

「え」

果たして詩織が持ち出してきた話は樹流徒が教室で数分間の内にあれこれ予想してきたもの全てから遠く外れたものであった。

色っぽい話になる可能性は薄いと思っていたが、まさかこのような

質問が飛び出すとは流石に予想していなかった。  
しかしだからといって黙っているわけにもゆかず

「世界が滅びる日か。僕には見当もつかないな。2012年説も信じてないし」

「そう。それじゃもう1つ。もし今日世界が滅びるとしたらどうする？」

「どこかで聞いたような質問だな」

「真剣に考えてね。哲学ゴッコをするために来てもらったわけじゃないんだから」

「なら何のためにこんな質問をするんだ？それも僕に」

「そうね。当然そう思うわよね。ごめんなさい、私の話す順番が悪かったみたい」

「というと？」

「先にこれを言っておかなくてはいけなかったの。相馬君……」

……世界は今日滅びるわ。

「……」

樹流徒は反応に窮した。

“今日世界が滅びる”。それがもし詩織なりのジョークなのだとしても良かった。だが彼女の目は真剣そのものだ。冗談を言っている訳ではなさそうだしどうも茶化して終いに出来そうな雰囲気ではない。

結果彼は、相手が真剣に話をしている以上こちらもなるべく真面目な態度で応じるのがベターではないか……と考えた。

「今日世界が滅びると言ってもその根拠は？」

「科学的根拠は無いわ」

「だろうな。あつたら大変だ」  
「そうね」

詩織は微かに<sup>まぶた</sup>瞼を下ろし視線を逸らす。物憂げな表情をする。

数秒の沈黙の後、樹流徒が口を開く。

「伊佐木さんは何故今日世界が滅亡すると考えたんだ？」  
「でも、リアリストや学者を納得させられるような説明はできないわよ」  
「それはもう分かった。別に何でも良い。例えば君の勘だとか。それとも君の願望だとか」  
「実は私、未来を予知できるの」  
「なるほど」

樹流徒は取りあえずそう答えるので精一杯であった。  
しかしすぐに別の言葉を探して切り返す。

「もし君が未来予知を出来ると主張するなら今度はその根拠を提示しないと」  
「残念だけれど私の予知能力は規模の大きな出来事しか見ることができないの」  
「え。それはどういう意味？」  
「今のところ世界滅亡以外の出来事は何も見えないということよ」  
「そうか。それなら仕方ないな」

樹流徒は視線を窓の向こうに移した。いつの間にかテニスコート  
の周りにいる部員の数は一〇名くらいに増えている。

「もういいわ。こんなところに呼び出した上に変な話をしてごめん

なさい」

詩織は特に失望した様子も無く淡々と謝る。

「いや別に。それに悪魔の証明という言葉もあるし」

「そう言ってももらえるのは嬉しいけれど。でもアナタ私の話を信じないでしょう？」

「完全に否定したりはしないよ。それより聞きたいことがある」

「何故この話をしたのがアナタなのか……でしよう？」

「そう。何故僕に？」

「それは話すと長くなりそうだからやめておくわ」

「そうなんだ」

「ええ。そうなの」

詩織は白く長い指をそつと伸ばして窓を少しだけ開いた。隙間からふわりと柔らかい風が入り彼女の前髪を揺らす。

「ね。相馬君。中学生の時のことまだ覚えてる？」

「中学の？」

「ええ。あの日私達が巻き込まれた“事件”のこと」

「ああ、あれか」

樹流徒には彼女が口にした“その事件”に心当たりがあった。

「また唐突な話を持ち出したものだな。だが忘れるわけが無い」

## 名も無き事件

樹流徒と詩織は中学時代に1度だけ同じクラスになったことがある。

そしてその年、彼らの学校でとある不思議な出来事が起きた。

5月の大型連休明け初日。空は晴れ渡り真っ白な雲が気持ち良さそうに泳ぐとても穏やかな天気だった。多くの生徒達が眠気を誘われ学校中が軽い倦怠感に包まれていた。

その日、午前中最後の授業に音楽を控えていた樹流徒たちのクラスは音楽室に移動していた。音楽室は校舎3階に位置しておりその前を走る廊下は当然ながら外壁や天井に囲まれている。普段生徒達が危険に晒される事などあり得ない場所だ。

だが、そのあり得ないことが起きてしまった。

どこからともなく現れた黄金色に輝く巨大な発光体が窓と壁をすり抜け、偶然廊下を歩いていた生徒達に直撃したのである。

それにより4名が意識不明となり病院へ搬送されたが、幸いその日の内に全員が意識を回復。後に受けた精密検査でも各部異常は見られなかった。

この不思議な事件は当日の全国ニュースで取り上げられた。学校には地元マスコミが取材に訪れた。

しかし日々大量の情報を消費するのが現代社会である。2日も経てば世間はこの事件のことなどほとんど忘れ去り、より鮮度の高いセンセーショナルな出来事を追い求めていた。事件の舞台となった校

内ですら1週間も経てば誰もそのことを口にしなくなっていた。一連の様子を映した画像でも存在していれば話は別だったかもしれないが、そういった物証が全くないので仕方がなかったかも知れない。

結局この一件は“窓の外で何かが激しいフラッシュを起こし、たまたまそれを見てしまった生徒達が気絶した事件”として片付けられたのである。ちなみにそのフラッシュの正体がなんであったのかという議論はなされなかった。議論の結果答えを得たところでそれが正しいかどうか分からないからだ。

今やこの名も無き事件に関する事実を正確に知っているのは被害者の4名と当時その付近にいたごく少数の生徒のみ。

そして……その被害者の中に樹流徒と詩織の2人が含まれていたのであった。

当時の回想を終えて、樹流徒は懐かしさに表情を緩めた。

「あれは本当に驚いたな。お互い生きていて良かった」

「そうね」

「でも何故、突然今そんな話を？」

「ううん。別に。ただなんとなく」

「そうか？もしかして伊佐木さんが僕をここに呼んだ理由と関係があるんじゃないかと思ったんだが」

樹流徒がそう言うと、彼女は答えず、代わりに

「話を聞いてくれてありがとう。相馬君で想像してたより話し易い人ね」

そう言つて微笑した。

「それじゃあさよなら」

彼女はそのまま背を向け歩き出す。

さよなら……か。

樹流徒は本棚から適当な本を手に取り真ん中辺りのページを適当に開いた。5ページほど読み進めると本を元の位置に戻して図書室を後にした。

## メイジ

樹流徒が改めて帰宅をするため荷物を取りに教室へ戻ると、そこに詩織の姿はもう無かった。帰ったのかも知れない。

代わりに、彼の机の上に尻を預けて突っ立っている男子生徒がいた。このクラスの生徒ではない。

黒い髪が毬栗いぐりの如く天を突き明らかに何かしらの手段でカチコチに固めている事が分かる。肩をダラリと下げポケットに両手を突っ込んでなにやらぶつぶつと独り言を唱えている。傍目には少しばかり近寄り難い青年だ。

樹流徒は青年をよく知っていた。恐らく学校中の誰よりも良く知っていた。彼の名はメイジ。樹流徒の親友である。

メイジというのは彼の本名ではなく愛称で、漢字を当てると明治と書き、本当は“あきはる”と読む。彼の身近にいる人々は、大半が彼のことを本名ではなく愛称で呼んでいる。樹流徒もその内の一人だった。

メイジは樹流徒が近付いて来るのに気が付くとニヤリとした。机から尻を離しポケットから手を出す。両腕を肩と同じようにダラリと下げた。気合の入った頭髪とは裏腹になんだか大儀そうだが、決して体調が悪いのではない。これが普段通りの彼なのであった。

現在の姿からは余り想像できないが、メイジは元々無駄に明るくて活発な少年だった。春が来れば新しいクラスメートたちに笑いを振り撒き、夏には蜂の巣を棒で突付いて大怪我をし、秋は誰よりも

運動会を楽しみにし、冬でも毎日短パンを穿いて外を駆け回る、元氣・やんちゃという言葉に服を着せたような少年だった。昔から仲が良かった樹流徒はいつも彼に振り回されていた。

だが中学の卒業を目前に控えた頃、メイジの様子は徐々に変わり始めた。少しずつ口数が減り笑顔も減っていった。樹流徒は何かあったのかそれとなく尋ねてみたが、本人は特別な出来事があった訳ではないと言う。だからそれ以上の追求はしなかった。10代半ばの青少年が性格や雰囲気を一変させるのは特段珍しいことではない。メイジもその一例に過ぎないと樹流徒は考えるようにした。

「よう樹流徒。随分長いトイレだったな」

メイジは片手を上げ挨拶をする。その手は伸びきらず重力に負けてすぐに下がった。

「トイレじゃない」

「まあどうでもいいや。それより今日は一緒に下校な。拒否権とかねーから」

「別に拒否なんてしない。何せ2人で歩くのも今日で最後になるかも知れないからな」

「あ？最後つてなんだよ？遠まわしな絶交宣言？それともオマエ転校すんの？」

「違う。もし今日世界が滅んだらそうなるって話だ」

「何だそれ？オマエが冗談言うの珍しいよな。特に面白くもねエのが残念だが」

メイジは頭を傾倒させ中指で首筋を搔く。

「うるさいな。早く帰ろう」

彼らは揃って教室から出ていった。

## 異変

ここは地方の都市・龍城りゆうじょう寺市。

元々広い土地を持つ市だったが数年前に隣接する市と合併したことにより現在では全国屈指の面積を有する。市内の真ん中に建つ龍城寺駅周辺を中心にIT・商業・金融関係のビルが多く立ち並び、一方で郊外には古い町並みを残している所や野生動物が生息する緑豊かな地域もある。

樹流徒はこの都市の近郊に住んでいた。とにかく人が多く、外は朝から夕方にかけて学生とスーツ姿のビジネスマンでごった返している。発展に成功し活気溢れる地域と言えるが、どこかせわしない地域とも言えた。夜になると案外静かだがそれでも少し前まで昼夜問わず狂ったように明かりがついていた。現在は色々と事情があつて多少落ち着いた雰囲気になっている。

校門を通り過ぎた樹流徒とメイジは、すぐ目の前を走る大通りを行く。この時刻、車道では車が数珠繋ぎになりガードレールに隔てられた両側の歩道は通行人で溢れかえっていた。

周りは建物だらけ。ビルの外壁に取り付けられたディスプレイには広告が映し出され別の建物には消費者金融関係の会社の看板が3つも4つもくっついている。地元の間人にとっては見慣れた景色であるが、樹流徒はこの町並みが少なくとも美しいと思つたことは無かつた。

2人の自宅は大体同じ方向にある。そのため途中まで一緒に帰る

ことができた。

彼らは横並びで歩きながら他愛も無い話をする。ネットの話題、服スポーツ、漫画やゲーム、映画、そして時々は恋や政治や勉強の話……本当に他愛も無い会話ばかりであった。

今日は一段と話が盛り上がって、気付けばいつの間にか大分歩いていた。ここで彼らはある十字交差点に差し掛かる。運悪く変わつたばかりの赤信号に捕まった。メイジは眉根を寄せる。

「ここの信号待ちキツイよな。この前時間測つてみたら2分53秒だったぜ。長すぎだろ」

「3分も待つのか」

「オイ、人の話聞いてたのかよ？2分53秒だったの」「同じだろ」

「樹流徒よオ。オマエ7秒あったら何が出来ると思つてんだ？」

「洗濯物のシャツ1枚たたむくらいはできそうだな」

「分かつてねエな。7秒つつたら俺が愛してやまない曲のイントロ部分が丁度聴ける時間なんだよ」

「そうか。知らんが」

「大体オマエは何も分かつてねエよ。本当のオレを何も知らねエ。

まあ……オレが隠してるつてもあるが」

「なんだよいきなり？」

信号待ちをしている行人たちの中から小さな笑い声、携帯電話のボタンを素早く打つ音、ヘッドフォンから漏れる音がしている。目の前を車が過ぎるたびにその音は途切れ、また聞こえる。

「ヘイ、樹流徒」

「何だ？」

「空に浮いてる模様、なんかカツコイイよな」

と、メイジ。いきなり何を言出したのか樹流徒には良く分からなかった。しかし彼が多少風変わりな言動をするのは今に始まったことではないので特別気にもならない。

「模様？雲のことか？」

樹流徒は正面遠くの空を眺める。だが別に面白い形をした雲は見つからない。あとは夕空が広がるばかりだった。

別に何も無いみたいだが。樹流徒は言おうとしてメイジの横顔を見る。すると彼の視線は天に向かい垂直に延びていた。それで樹流徒も彼を真似て同じ方角へ視線を送る。

樹流徒は……目を疑った。かつてこれほどまでに自分の目を疑った事は無かった。

遙か上空に、紫色の光で描かれた奇妙な紋様が浮かび上がっているのだ。かなり鮮明に見える。直径20センチ程度の円に、三角形と逆三角形を重ねたいわゆる六芒星が描かれている。その他にも見知らぬ文字が全体に散りばめられている。地上からこれだけの大きさで見えるならば実際はかなり大きさに違いない。

「もしかするとUFO？」

樹流徒は少なからず興奮した。声の大きさも普段の3割り増しくらいになった。対してメイジはとも落ち着いている。

「知らね。でも少しずつデカくなってねエかアレ？」

「本当か？」

樹流徒は空に浮かぶ紋様の大きさに注目する。

すると確かにメイジの言う通り、それは僅かずつではあるが確実に広がっていた。

信号の色が切り替わる。

しかしその場に立ち止まったままジッと空を見上げる2人はその場を動かない。

そんな彼らの姿を見た別の通行人もまた何事かと思いい立ち止まって空を見上げ、それによって更に立ち止まる人が増えてゆく。

いつの間にか大勢の人々が上を見上げていた。辺りにはわかには騒がしくなり、携帯電話のシャッター音やムービー撮影の操作音が増えてゆく中、謎の紋様はますます大きくなってゆく。

そして円の直径が大体1メートルくらいにまで達した時、樹流徒を含めた多くの見物人達はある事に気付き始めていた。

――あの紋様、大きくなっているというより地上に近付いているんじゃないか？

その認識が正しいかどうかは誰にも分からなかった。近付いていると錯覚するくらい大きく広がっているだけなのかも知れない。しかし異常事態であることには変わりなかった。

「何あれ？絶対映画の撮影とかじゃないよね？」

「ああ。これ今年の人類滅亡説来ちゃったりして」

どこかの若い男女が冗談っぽい口調で言葉を交わす。その会話が耳に入って、ふと樹流徒の脳裏に、先程図書室で詩織から聞いた話が浮かんだ。

世界滅亡？まさかそんなことが本当にあるわけない。偶然が重なる

っただけだ。

彼は内心で否定したが、謎の紋様はやはり地上に迫っている様に見える。不吉な予感が拭えない。

そんな彼の横でメイジは薄い笑みを浮かべている。その瞳は密かにキラキラしていた。

そして…… 2012年11月26日午後4時09分

龍城寺市の上空を多い尽くすまでに広がった謎の紋様から突如降り注いだ黒い光が人々を飲み込んだ。

## 目を覚ますと

熱い！

背中が焼けるように熱い。

樹流徒はその痛みで目を覚ました。左の肩甲骨辺りが何故だかチリチリする。怪我を負ったのかもしれない。

だが瞳を開いた瞬間飛び込んできた景色がその痛みを忘れさせた。

視界いっぱい広がったのは一面黒っぽい水色に染まった空。宵とも明け方とも違う、見たこともない不思議な色をしている。

それに太陽、月、星、それに雲から鳥まで、本来そこに何かしらあるべきものが一切見当たらない。

樹流徒は仰向けに倒れていた。頭や背中にはゴツゴツした感触がある。すぐにアスファルトの上であることに気付く。辺りは静寂に包まれている。人の話し声も地面を擦るタイヤの音も聞こえない。

これは一体どういう状況なのか？記憶を辿る。

メイジと一緒に下校している最中、上空に謎の紋様が現れて辺り一帯が黒い光に飲みこまれた。そこまでは覚えていてる。だがそれより先の記憶が無い。光を浴びた時点で意識が途絶えたのかも知れない。

樹流徒はようやくよく上体を起こす。

するとそこには、たったいま目にした光景よりも更に信じ難い光景が広がっていた。

人々が道路の上に横たわっている。それが視界の届く範囲までずっ

と続いていた。皆生きているのか死んでいるのか分からない。ただ動いている人が誰もいない。

車道の中も滅茶苦茶だ。あちこちで車が衝突している。トラックの後部に突っ込んだ軽自動車ボンネットを開きフロントガラスに蜘蛛の巣状のヒビを入れている。ガードレールの無いところから歩道に飛び出した車が店のショーウィンドウに突っ込んでいる。ドライバーたちは皆車の中で意識を失ったままだ。

そして遠くのビルからは火の手が上がり黒い煙がもうもうと立ち昇っていた。その更に向こうは何故か濃い霧に覆われている。気味の悪い紫がかつた霧だ。良く見れば遠方の空は全てその霧に包まれていた。それによってここら一帯の上空にだけぼっかりと穴が開いた怪異な現象が起こっていることに、今気付く。

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。それこそ本当に詩織が言っていた世界の終わりが来てしまったのではないかと思わせる、全く生の存在を感じさせない、悪い冗談みたいな景色だ。せわしなくも平和だった街の面影は無い。

彼はこの変わり果てた街の様子を前にして少しの間ぼんやりしていたが、やがてはっとした。

そういえばメイジは？アイツは無事か？

すぐ隣を見る。しかしそこに彼の姿はない。

もしかするとアイツは僕より先に目が覚めたのかもしれない。樹流徒はそう考えることにした。

その場で立ち上がる。全身に痛みはないがまだ背中に焼けるような痛みを感じた。制服の上着を脱いで手を伸ばし指先で痛む部位に触れてみる。肌は滑らかなままで少なくとも酷い外傷を負った様子は無い。ひとまず安心した。特に我慢できないほどの痛みでもない

ので歩くだけなら全く支障は無い。その内にこの痛みも引くだろうと決め付ける。

樹流徒は歩き出した。目の前で倒れている人に近付き声をかける。だがそのサラリーマン風の男は意識が無かった。胸が上下しておらず呼吸をしていないように見えた。口元に耳を近づけてみると実際息をしていない。

携帯電話を取り出す。モニターを見ると時刻は午後6時半。メイジと一緒に学校を出てから2時間以上経っている。続いて119番と110番を押してみる。しかしいずれも繋がらない。そこで最後の手段として、うる覚えの応急手当を施してみる。だがそれも虚しく効果は無い。そもそも“急に应じる”と書いて応急だ。2時間以上も経った今では無意味に等しい。

「誰か生きてる人はいないか？生きているなら返事をしろ！誰か！起きろ！」

生まれて初めてというくらい大きな声を張り上げた。しかしその声は余りにも虚しくビルの隙間に消えてゆく。日常における無力感などとは比較にならない圧倒的な虚無感がそこにあつた。

彼は取りあえずこの場から移動する事にした。家族の安否を確認するため自宅へと向かう。自宅まではまだ多少距離が残っている。走っても10分はかかりそうだが、人を踏まぬよう気をつけて歩かなくてはならないことを考えると、もう少しかかる。

……

先へ進んでも視界に映るのは道に横たわる人々ばかりだった。自動ドアやガラス戸を通して建物内で倒れている人たちの姿も見える。

また、被害に遭ったのは人間ばかりではなかった。犬も猫も倒れているし普段は電線の上から人々を見下ろしているガラスたちも地面に落下している。

その一方で建物などには特に何の影響も見られない。車に突っ込まれて損傷した建物などはあるが、空から降り注いだ謎の光により直接破壊された物はない。

実に不思議な光景だが、樹流徒はこれとよく似た現象を知っていた。今一度、中学時代に巻き込まれた事件を思い出した。

## 謎の男

自動車は一方通行しか許されていない狭い道が、少し複雑に入り組んでいる。

ここはとある住宅街。一軒家が多く立ち並んでいる。その中には樹流徒の実家もあった。もう目と鼻の先にある。

彼は、恐らく自分の家族も黒い光の影響を受けているだろうと考えていた。助かっていると信じたがい街の様子を見る限りそれも都合が良すぎるように思える。ただみんなの容態がどうなっているかまでは分からない。自分のように気絶しているだけかもしれない。希望は残されていた。家に近づくにつれ足取りは速くなる。

と、その時。

道路の真ん中に人が突っ立っている。目を覚ましてから初めて動いている人を発見した。樹流徒はちよつとした安堵を覚えて自然と表情が緩んだ。

その人物はYシャツとネクタイにベストを身に着けた30歳前後の男だった。スラリとした体型をしており、一見どこにでもいそうだが手入れの行き届いた小綺麗な顔をしている。

男はこの状況に呆然と立ち尽くしているのかと思つたら、逆にどこか落ち着いた様子だ。そして樹流徒を待ち構え行く手を阻むかのよう立っている。

2人が向かい合つと、男は目を丸くした。

「わ。こりゃ驚いた。あの光を浴びて生きてる人がいたなんてね」  
軽い口調でそのような事を言う。

「すみません。急いでいるのでどいてもらえますか？」

「そんな急いでどこ行くんだい？青年」

「自宅です。家族の安否を確認しに」

「ほう。そりゃ健気だね。でも君には気の毒だけど多分ご家族は亡くなってるよ」

男は不吉なことをサラリと言った。

「なぜ死んでいるとわかるんです？」

樹流徒は微妙に眉を寄せる。

「ああ……ゴメン。ちよつとストレートに言い過ぎたね。謝るよ」とすると男は小さく頭を下げてから

「でも、僕から言わせたら君が生きてる事の方がよっぽど“なぜ？”

”なんだケドなあ。良く生きてたね」

そう言つて首をかしげる。

「まるであの黒い光の正体を知っているみたいな口ぶりですね」

「え？ああ……うん」

「もしかしてアナタは何か知っているんですか？」

「ん……まあね。つて言っても肝心な部分については良くわからないんだけどさ」

男は少なからず何かを知っているらしい。それをあっさり認めた。

「ならアナタが知っていることだけでいいので教えてもらえませんか？」

「別にそりゃ構わないけどさ。多分話しても信じてもらえないよ？なんせ非常識でブツ飛んだ話だからね」

微笑する。

「既に現状が非常識ですから」

「うん、まあそうかもね。じゃ教えてあげよう。でもそれならどう

かのお店に移動しない？今なら食い逃げし放題だしさ」

「本気で言ってるんですか？」

樹流徒は呆れた目で男を見る。

「あゝ冗談よジョーダン。君ってばあんまジョーク通じないタイプ？」

「冗談でも言つて良いことと悪い事があるでしょう」

「ゴメンゴメン。君の言う通りだ。悪かった。それじゃ公園いこうか。あそこの水道水ならいくら飲んでも問題ないしね」

「……」

樹流徒は男を訝しげに思う。しかし情報を得るため彼についてゆくことにした。

家族の安否は気になるが、この街に一体何が起こったのかも同じくらいに気になる。それだけ情報が無いというのは不安だった。

すぐ近くの公園へ移動を始める。

## 魔都生誕

移動中

「いやあ酷い有様だね。まさにこの世の終わりってカンジ？」

男は辺りを見回しながら平然と語る。非常にさばさばした態度だ。不謹慎に見えなくもないが、明確な悪意が感じられるわけではない。いずれにせよ樹流徒はこの男をいちいち咎めるような心持ちではなかった。

「みんな死んでしまってるんですか？」

樹流徒はあえて言葉を選ばず直接的な表現で尋ねる。

「そのハズなんだけどさ。君が生きてるんだから他にも生存者いるかもね」

「そう言うアナタはなぜ無事なんです？あの光を浴びなかったんですか？」

「それは秘密。ところで君、本当に普通の人間だよな？」

「どういう意味です？」

「いや別に。特に深い意味は無いんだ、うん」

男は取り繕うように微笑した。

約5分後。

2人は市営の公園に到着した。数本の外灯、時計、水道、それに公衆トイレとベンチが設置されている。あとは適当に刈り揃えられた芝生と濁った池があるだけのただっ広い場所だ。

普段は市民にとって憩いの場となっているこの空間も現在は異様か

つ殺伐とした光景を晒している。犬のリードを握ったまま倒れている老人や、池に架かった橋の手すりにもたれかかったまま動かない青年などの姿が見える。

「ベンチに座ろうか。あの辺には誰も倒れてないしね」

男の提案で公園の一角に置かれたベンチに向かう。空よりも少し鮮やかな水色のベンチには大人3人が余裕を持って座れるくらいのスペースがある。

彼はベンチに腰掛け、樹流徒はその斜め向かいに立った。

「君も座つたら？」

男は掌でベンチを軽く2度叩く。

「結構です。それより話を聞かせて下さい」

「はは。つれないなあ。……で、何を話すんだっけ？」

「僕達を襲った黒い光の正体についてです」

「うん。そうだった。でもそれを説明するには先に話しておかないといけないことがあるんだ」

「なんです？」

「まずはじめにね。今回の一件は“悪魔”の仕業なんだよ」

「え」

男の口から悪魔という予想だにしない単語が飛び出して、樹流徒はまともに返事をする事が出来なかった。そしてすぐに小馬鹿にされたような気分になる。そのくらい突飛な展開だった。

「驚いた？君はモチロン悪魔を知ってるよね？天使と悪魔の悪魔だよ」

「知ってますけど空想の産物ですから」

「いやそれが実在しちゃうんだな。信じられないだろうけどさ」

男はそう答えてから

「ところで、君もあの巨大な“魔方陣”は見ただろ？」  
まだ得心がいかない樹流徒を半ば無視する形で話を先へ進める。

「魔方陣って、もしかして上空に現れた変な紋様のことですか？」  
「そう。ご名答。あれは俺らの住む現世と悪魔たちが住む魔界とを繋ぐ扉なんだよ」

「現世と魔界を繋ぐ扉……」

樹流徒は小首をかしげる。正直このテの話にはついてゆく自信が無かった。公園に来る前「常識でブツ飛んだ話になる」と前置きはされていたが、些か予想の範疇はんちゆうを超えていた。

「悪魔がムリヤリ俺らの世界に大穴を開けて通路を作ったってわけだね。ホント迷惑な話だと思わないかい？」

「信じ難い話ですが……悪魔と魔法陣は分かりました。けど、結局あの黒い光は何だったんですか？」

「それは今から説明しようと思ってたところだよ。あの光はね、2つの世界が繋がった瞬間の衝撃によって発生した現象なんだ。霊的な現象に近いのかな」

「そもそも霊的な現象と言われてもピンとこないです」

「うん。まあそれがフツーの反応だよ。でもそうとしか説明のしようが無いんだ」

「はぁ……」

「信じるとは言わない。でもとりあえず今は非科学ありきで話をさせてもらうよ。そうしないと何も言うこと無くなっちゃうからね」  
「分かりました」

樹流徒は、納得はできないが首を縦に振った。

「さて。あの光は本来普通の人間が耐えられるようなものじゃないんだ。だが君だけは何故かこうして生きている。これは一体どういう事なんだろうね？」

「それは僕が聞きたいです」

「君自身に心当たりは無い？」

「ええ」

樹流徒は首肯する。本当に心当たりなどなかった。男はなるほどねと呟きながら2、3回小さく頷く。

「ちなみに俺は今回の現象を“魔都生誕”と名付けた」

「マトセいたん？」

「そう。この都市は魔界と繋がっちゃったわけだからね。魔都と呼ぶにふさわしいでしょ。今日はその魔都が生まれた日。誕生日というわけだ」

「……」

今回の事変を引き起こしたという悪魔。その悪魔が住むという魔界。現世と魔界を繋ぐ扉・魔法陣。そして魔都生誕。もう滅茶苦茶だった。樹流徒は自分の中で現実や常識という概念が儚くも崩れてゆく音を確かに聞いた。

## 封鎖

「さて。これで君の知りたがってた黒い光の正体に関しては説明終了したんだけど……まだ何か質問があったら言ってもいいよ」と、男。樹流徒は遠慮なくそうさせてもらうことにした。今すぐ思いつくだけでも他に聞きたいことは残っている。

「今までの話が仮に本当だとして、それを知るアナタは一体何者なんでしょうか？」

「ああやっぱ気になっちゃう？でもゴメン。それ秘密なんだ」

「なぜ秘密なんです？」

「うん。それも秘密」

男は自分の素性を明かすつもりは無いらしい。樹流徒はそれを察して早々に質問を変えることにした。

「それじゃあ悪魔は何のために世界を繋いだんですか？」

「うん。イイ質問だ。実は俺もそれを調べてるんだよ」

「え。なぜ？」

「ゴメン。それもナイシヨ」

「はあ……」

樹流徒は少し顎を上げ視線を遠くの空へと移した。そこにはまだ紫色の厚い霧がかかり向こう側の景色を覆い隠している。

水色の空と紫色の霧。大地に横たわる人や生き物たち。改めて見ると、男の話が根拠も無く信憑性を帯びてしまうほどの光景であった。

「被害は一体どこまで広がったんでしょうね？」

「どつだろつね。魔方陣が広がった範囲までだけだと思っけど、実際どうなってるか確かめようが無いからね」

「どうして確かめようが無いんです？被害が及んでいない場所まで脱出すれば良いだけなんじゃないですか？」

樹流徒が疑問を呈すると

「いやそれがさ。この市内、封鎖されちゃってるみたいなんだよね。男は頭の後ろを掻きながら「参ったね」と笑う。だが樹流徒にとつては全然笑い事ではなかった。むしろ目耳に水である。

「封鎖？一体誰がそんなことを？国……自衛隊ですか？」

「いやいや。誰って言うより……遠くに紫色の霧が見えるだろう？」

「ええ」

「あの霧に隠れちゃってここからだとは分からないんだけどさ。もの凄くデカイ壁がこの市内をぐるっと囲っちゃってるみたいなんだよ」

「デカイ壁って……何なんですかそれ？」

「“結界”っていうんだけどね。生物や被造物はあの壁を通り抜ることができないのさ」

「その結界とかいうのも悪魔の仕業だと言っんですか？」

「うん。間違いないんじゃない？ホント困っちゃったね。ハハハ」

「何がそんなに面白いんです？」

流徒はついにカチンと来て男を睨む。多少焦っているせいもあった。

「悪い悪い。君を少しリラックスさせてあげようと思ってさ」

男は少しだけ真面目な顔を作って謝り

「さて。よく考えたら俺が君に教えてあげられそうなコトもう無さそうだからさ。そろそろ行くね」

ベンチから立ち上がる。

「あ………そうですか。ありがとうございました」

「いって、いって」

樹流徒が小さく頭を下げると、男は手をぶらぶらと左右に振って応える。それから片手でネクタイの位置を直すと「じゃあね」と明るい声を発して歩き出した。

が、たった数歩進んだところで立ち止まる。

「そうそう。さっきの質問だけど一部だけ答えるよ」

そう言いながら樹流徒の方に向き直った。

「なんです？」

「俺が何者かって話。俺の名前は南方万<sup>みなかたよろず</sup>。それだけ。あとは秘密」

「僕は相馬樹流徒です」

「ふうん、キルト君か。覚えとくよ。縁があつたらまた会えるかもね。案外仕事の最中に出くわしちやったりして」

「え。仕事って？」

「おっと、口が滑った。こりゃマズい。そんじゃ今度こそさよなら」

南方と名乗る男は足早に去ってゆく。

樹流徒はその後を追うべきか一瞬迷ったが、早く家族の安否を確かめたい事もあつてそのまま彼の背中を見送った。

## 絶望の中で

再び1人になった樹流徒は南方と出会った場所まで引き返し、そのまま自宅に到着した。道中で他の生存者と出会うことを期待したがそれは叶わなかった。

相馬家は白い外壁と紺色の陸屋根が特徴のデザイン住宅。間取りは4LDK。主寝室とガラス戸1枚を隔てて小さなバルコニーがある。庭の敷地は車2台分のガレージが大半を占拠し、隅には家庭菜園用の狭小な花壇が設けられている。

樹流徒は玄関ドアの前に立つ。ひとつ息を吐いてからノブに手をかけた。普段彼が学校から帰宅してくると鍵は開いているが、今日も例に漏れずノブは抵抗無く回る。

中は物音ひとつなかった。人の気配が全く感じられない。静寂に压倒される。

眼下には見慣れた靴が並んでいた。弟のスニーカーが雑に脱ぎ散らかされ、妹の靴はきちんと踵を揃えて置かれている。秋になってから母が毎日履いているローヒールパンプスもあった。

彼は固唾を飲み、家にかかる。床は硬く冷たい。突き当たりに見えるドアがやけに遠く感じた。

それからしばらくして玄関の扉が勢い良く開いた。すぐに激しい

音と共に閉じられる。

家の中から飛び出てきた樹流徒の顔は少し青ざめていた。呼吸もわずかに速い。

彼は家族たちとの対面を果たした。しかし息をしている者は誰もいなかった。皆ぞつとするほど青白い姿に変わり果てていた。

母は台所の食器棚付近で倒れ、その傍には床に落下した平皿の破片が飛び散っていた。弟と妹は2階の一室で重なるように倒れていた。ビデオゲームで遊んでる最中だったようである。

樹流徒は視線を落とす。一瞬、地面の形が歪む幻覚に襲われた。玄関の扉に背を引きずりながら座り込む。頭を抱え両手で前髪をくしゃりと握り締める。

現実を受け止めるのには少し時間が必要だった。もちろんこの結果を予想していなかったわけではない。だが人間は何でもかんでもそう簡単に割り切れる生き物ではなかった。

やがて彼は立ち上がりおぼつかない足取りで歩き出した。行くあてなどない。ただとにかくこの場から離れたかった。

.....

自分が今どこにいるのか良く分からない。歩き始めてから何分経ったのかも良く分からない。しばらくの間そんな状態で彷徨っていた樹流徒はようやく落ち着きを取り戻し始めた。

途端に喉の渇きと足の疲労を思い出し、すぐ目の前に建つマンションの階段に腰を下す。そしてぼんやりと空を見上げる。

あれから上空の様子は全く変化が無い。黒っぽい水色を保ち続け  
幻想的な光を地上に注いでいる。そのため今が何時なのか見当が  
つかなかった。

前屈みになつて首を垂れると壁際に小さな羽虫が1匹転がっている。  
微動だにしない。ほぼ静止した世界だ。乾いた風に揺れる草木と  
瞼まぶたにかかった前髪の端だけがかるうじて視界の中で動いている。

一息つき、樹流徒はこれからのことを考えることにした。今後自  
分がどう行動すべきなのかを模索する。

決して健全な意味で前向きになつたわけではなかった。何も考えず  
にいると先程見てきた嫌な光景が脳裏に浮かんでくる。だから頭を  
働かせずにはいられない。ただそれだけだった。

それでも今後を真剣に考えることには違いない。色々と思案して  
みた結果、彼の中で4つの選択肢が浮かんだ。

1つは大人しくどこかに待機して外部からの救援を信じて待つこと。  
1つは自分以外の生き残りを探して歩き回る事。  
1つは被害が及んでいない土地への脱出。ただし南方によればこの  
土地は封鎖されているらしい。それが事実ならば脱出は不可能かも  
しれない。

そして最後の1つは、この事件の真相を探すこと。

全ての選択肢が出揃った後、殆ど迷うことなく決断を下した。彼  
が選んだのは真相の究明。

今回の事件が悪魔の仕業だろうとそうでなかつたら、このまま何も  
知らずにいるのは耐え難かつた。この市内で何が起きたのかを確か  
めたい。そこに何者かの意思が介在しているならその人物或いは集  
団が何の目的で魔都生誕を引き起こしたかを知りたい。

自分1人の力で何を確かめられるのかは分からない。そもそも一体どこで何を調べたら良いのかすら知らない。そして仮に真相を知ったとしてその後どう行動するかも今は何も考えていない。全くの不透明。真っ暗闇だ。  
だがそれでもやると決めた。

意思が定まったら最早ジツとしてはいられなかった。嫌な記憶や絶望感が頭をもたげる前に腰を上げる。

先ずは本当に市内が封鎖されているかどうかを確認しに行くことにした。手持ちの情報では他に確かめられる事が無い。

彼は遠方の景色を覆い尽くす紫色の霧を目指して歩き始める。その奥に市を封鎖している壁・結界があると南方は言っていた。

## 遭遇

ここは溪瀬たにせ通り。6車線の道路が約7キロに渡り東西へ延びており、それと併走する高い建物が下界を眺めていた。市内でも特に交通量が多い場所の1つである。

樹流徒が意を決し動き始めてから数十分。彼はその溪瀬通りを訪れていた。歩道は人々で埋め尽くされ足の踏み場が無いと言っても過言ではない。そのため中央分離帯の植え込みを歩いていった。しかし分離帯に乗り上げたり対向車線に飛び出している車も多く決して移動しやすいわけではなかった。ちよつとした障害物コースみたいになっている。

車の間を縫って進み、場合によっては上を乗り越えなくてはならない。心身の疲労もあって余計に前へ進むのが遅れる。どこかで一度休憩を挟まなければ目的地へたどり着くのは無理そうであった。

霧が立ち込めている場所までまだ長い道のりが残っているにもかかわらず、既に周囲の視界は相当悪い。銀行前に設置された時計が秒針を刻んでいる。現在夜の10時半過ぎ。しかし相変わらず変化の無い空の色が時間の感覚を狂わせる。

樹流徒はそんな中を淡々と歩き続ける。今は希望も絶望も持たないようにした。目の前の景色にだけ意識を集中しひたすら足を動かす。

だが、ようやく通りの半ばに差ししかかったその時であった。

彼は不意にあるものを視界に捉え足を止める。遠く前方に大型トラックが1台停止しているのだが、その陰で何か動いた気がした。霧のせいではつきりとは見えなかったが、気のせいでは無い。

そこでしっかりと目を凝してみるとやはり動く影がある。その影は大部分がトラックの後ろに隠れており全体像が把握できないが、人に見えた。大きさからして恐らく子供。

生存者との予期せぬ遭遇に樹流徒は思わずあつと小さな声を出した。そして飛び出す。彼もしくは彼女がトラックの陰なんかで何をしているのかは分からない。だがそれは些末な疑問だった。とにかく生きている人がいる。それだけで良い。疲れを忘れて全力で跳び走る。

だが、お互いの距離が大分縮まったところで再びその足は止まった。それどころか1歩後退する。

人影に違和感を覚えた。樹流徒は表情を硬くして今一度トラックの向こうを凝視する。

すると……人間だとばかり思っていたその影はどうも違った。人間と似た形はしているが明らかに異なる輪郭を持っている。尻と思われる部分からは長細い尾を垂らし、背中と思われる部分からは羽が生えているように見える。

謎の生物は樹流徒の存在に気付いていないようであった。彼は足音に気をつけながら反対側の車線へ移る。

背を低くして車の陰に体を隠しながら前へ進む。立ち止まると、息を殺して顔だけを出す。トラックの前でうごめく謎の生き物を覗き込んだ。

全身が凍りついた。やはりその生き物は人間ではなかった。動物

でもない。

長い尾と黒い羽を生やした小人である。肌は赤土色と紫色を混ぜたような不気味な色をしている。化物だ。

樹流徒はその存在を目の当たりにして一驚したが、それ以上に化物の行動に対して戦慄した。

化物の正面にはライダージャケットを着た人が仰向けになって倒れている。体格からしておそらく男性だ。バイクから落ちたのだろう。先程まではトラックの陰に完全に隠れており見えなかった。化物は背中を丸め男性の頭に顔を近づけ何かをしていたのである。耳を澄ませばクチャクチャという生々しい音がする。そこで何が起こっているのか容易に想像がついた。

人間を……食っている！

樹流徒の体は更に激しく凍りつく。指先は震えた。目の前で人間が謎の化物に捕食されている。信じられなかった。

それでも彼の脳内は体と真逆の反応を起こしていた。血が昇り熱くなっていた。カッとなる。

気付けば衝動的に車の陰から躍り出ていた。化物めがけ一直線に駆ける。

## 戦闘

化物は背後から接近する足音に反応した。即座に振り返るとその醜悪な形相を樹流徒へ向ける。

額からは小さな角が2本飛び出し瞳は血の如く真っ赤に染まっている。そして口の周りには言葉にするのもおぞましいモノが付着していた。

――ギギイ

化物は立ち上がり甲高い奇声を上げる。威嚇のつもりだったのかも知れない。だが樹流徒は止まらなかった。怒りと興奮の勢いに任せて化物を蹴り飛ばす。

彼のつま先に腹を強く蹴られた化物は地面を数メートル転がった。見た目より大分軽いようである。車のタイヤにぶつかって止まった。

樹流徒は化物に漁られていた男性の死体をちらと見る。既に原形を留めていなかった。特に頭部の損傷が激しい。吐き気を堪えながら目を逸らした。

倒れていた化物がウウと低い唸り声を出しながら起き上がる。先の一撃にどれだけの効果があったかは分からないが樹流徒の目から見て殆どダメージを負っていないように見えた。

彼は再び自ら化物に向かってゆく。小さく跳躍すると上空から敵の頭部めがけ足の裏を落とした。

それは空を切りアスファルトを踏みつける。化物は身軽な動きで樹流徒の顔に飛びついていて。両手から伸びる鋭い爪を食い込ませ、

頭部に牙を突き立てた。

樹流徒は慌てて腕を伸ばし化物の背中に手を回す。手探りで羽を掴むと思いい切り引つ張った。

化物は思いの外簡単に剥がれた。空中で手足を暴れさせる。樹流徒は羽をしっかりと掴んで離さない。腕を振り下ろし敵を地面に叩きつけた。すかさず足の裏で踏む。

2回、3回と踏みつけるたびに化物は奇声を発する。だがその声は樹流徒の耳に届いていない。彼は反撃を受けたこともあつて必死だった。狂ったように踏み続けるとやがて化物は沈黙した。

微動だにしなくなった敵を眼下に据え、樹流徒は荒い呼吸を繰り返す。

パタパタと赤い液体が滴った。彼はそれが自分の頭部から零れ落ちているものと気が付いた。先程噛まれた時に切ってしまったらしい。酷く興奮していたため何も感じていなかった。それが今じわりと痛み出す。

だがその痛みを気にしている間もなく目の前で奇妙な現象が起きる。

化物の全身が崩れ始めたのである。まるで炎に焼かれた紙みたたく徐々に消えてゆく。同時に、消滅してゆく体から光の粒が大量に放出され空中を漂い始めた。赤黒い、なんとも不気味な色をした光だ。

化物は死んだのか？この光は何だ？樹流徒は奇怪な現象の連続を前にして棒立ちになる。

すると突然であった。シャボン玉のようにふわふわと漂っていた

光の粒が急に方向を変える。彼の元へ集まり始めた。咄嗟に手を払う。だが光は次々と飛び込んでくる。間もなく全て彼の体内に消えた。

直後、更に不可解な現象が起こる。樹流徒は自分の全身から力がみなぎるのを感じた。それだけではない。眠気や喉の渴きまでもが何処かへ消し飛んでしまった。

加えて頭の痛みが嘘のように引いてゆく。そつと傷口に触れてみると指先はぬるりとした感触と共に赤く染まる。だが新たな血が流れ出てこない。それは普通考えられない事であった。こんなに早く傷口が塞がるはずがない。頭部なら尚更だ。

樹流徒は今、己の体に何が起きているのか全く理解できなかった。考えてみたところで恐らく分かりはしない。何せ全てが超現実的であった。ただ五感で得た情報をそのまま鵜呑みにするしかない。

ところで、彼は自分の体のことはひとまず置いておくとして、化物に関しては1つだけ心当たりがあった。それは南方から聞いた悪魔という存在である。

「今倒したのは悪魔だったのか？」

樹流徒は独り言を呟く。

そういえば化物の姿は一般的に連想される悪魔のイメージと似ている。角と尻尾を生やした小人。思い出せば思い出すほど酷似している。だからといって本当に悪魔だという証拠にはならないが、同時に否定することもできない。

とりあえず今の段階で言えることは、常識では測れぬ何かがこの地で起こっているということであった。



## 結界

謎の生物との遭遇から更に数時間は経っている。

正確な時刻は確認していないが深夜には違いない。空色は未だ変わらず。

その間、樹流徒は自分の体に明らかな異変を感じていた。具体的にはいくら歩いてても全く息切れをしないのである。足も疲れない。眠気も感じないし飢えや渴きもない。

お陰でまだ一度も休憩を取っていなかった。この状態を「気のせい」の一言で済ますのは無理がある。

体の状態がおかしい原因は何か？考えるまでも無かった。心当たりは1つしかない。化物から放出された光を体内に取り込んでしまったことだ。

樹流徒は、自分の身が心配である以上に気分が悪かった。人間の死体を貪っていた化物が何らかの形で自分に組み込まれているかも知れないと想像すると軽い吐き気がした。

そして彼は図らずも手に入れてしまった疲労を知らぬ体により、とうとう一度も中休みすることなく目的の場所にたどり着いてしまった。

そこは龍城寺市と隣の市の境目。これと言って特筆すべきところも無い全国至るところで見られる町並みが広がっている。それでも敢えて特徴を述べるなら辺りには一軒家の民家が多いということぐらいだろうか。いわゆる住宅地である。逆に大きな建物は全く無い。

辺りはいよいよ濃い霧が立ち込めておりわずか数十メートル先の様子が見えない。

樹流徒の目の前には車道が横切っている。それは丁度2つの市を区切る境界線であった。

彼は道路を渡る。これで一応龍城寺市から隣の市へと移ったことになる。南方は市が封鎖されていると言っていたが1歩も外に出られないというわけではないらしい。最も地図に合わせてキツチリ龍城寺市だけが封鎖されていることの方がおかしい話であった。

ならば一体どこまで進む事ができるのか？それを確かめるため樹流徒は更に奥へと進む。

するとそれからわずか3分足らずの後。車道に沿って歩いてきた彼は立ち止まった。目を見開き、顔をゆっくりと持ち上げる。

彼の前方には巨大な壁が出現していた。現在の空と同色の平面が行く手を遮っている。霧のせいでもここまで続いているのかは不明。だがとにかく大きい。

樹流徒は一瞬我を忘れていたがすぐはっとして壁の間近まで駆け寄る。

するとそれは地面を深々とえぐり民家を真つ二つにしながら延びていた。表面からは紫色の霧が緩やかな勢いで放出されている。どうやらこの壁が霧を発生させているらしい。

もしかする南方の言っていた結界とはこれのことなのだろうか？樹流徒は今一度壁を見上げる。それから思い切って掌で触れてみることにした。

すると結界（？）の表面は滑らかでプラスチック製品とよく似た感触が伝わってきた。握り拳を作って軽く叩くとコツコツと小気味良い音が返ってくる。壁の厚さは分からないが強い衝撃を加えれば壊せそうな気がした。

そこで実際思い切り蹴りとはしてみる。

ビクともしなかった。一発蹴っただけでこれ以上叩いても無駄だと分かった。

どうやら南方から聞いた情報は少なからず本当であった。結界が市内全体を囲っているかどうかまでは分からないが巨大な壁が存在していることは事実だ。

魔都生誕が起きてから相当時間が経っているにも関わらず外部の人間と接触できないという事実も南方の話に信憑性を持たせている。

樹流徒は事実を悲観することなく受け入れる。むしろ真相に1つ近づけたことに満足すら感じた。

だがその余韻を味わう暇はなかった。突然、背後からただならぬ心配を感じる。

振り返ってみるとそこにはいつの間にか人間らしき者が立っていた。

ただし人間であると断言することはできない。その者は2メートル近い巨体でフードがついた黒いローブを頭からすっぽりと被っている。しかも右手には鋭利なナイフ、左手には巨大な弓を持ち無数の矢を背負っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5644x/>

---

悪魔倶楽部

2011年11月5日03時11分発行